



Title	古屋美貞註譯 『チード・リストの經濟思想史上卷』
Author(s)	手塚, 壽郎
Citation	商學討究 (1935), 10(2): 174-179
Issue Date	1935-10-05
URL	http://hdl.handle.net/10252/3998
Rights	

This document is downloaded at: 2012-05-17T06:07:32Z



無理であるが、本書を一貫して著者が高揚しようとする「物理的事實」以外の諸要素、特に工業や國際貿易の發展の可能性といふが如き要素がすでに詳しくマルサスの論著の中に説かれてゐることを想ふものは、少くともこの點が仔細に吟味されてゐないのに不滿を感じるであらう。

おしなべて本書の理論的部分は明快を缺き、積極的に寄與するところも多くはない。本書の重點はむしろ第二部以下の「應用」的論述の部分にある。そしてこの部分は人口問題研究家に多くの便益と省察の機會とを與へるであらう。(昭一〇・九・二九)

古屋美貞註譯『デード・リスト の經濟思想史上卷』

手塚壽郎

西洋諸國に於ても、我國に於ても、經濟學史は、大學の經濟學教育の教科目中の重要な一つとして、十九世紀末から取り入れられてゐる。時間的關係から見ると、だから經濟學史は、經濟學の比較的に興なる領域であると云つてよい。

新興の科學又は科學の領域には、我々が想像し得る以上に、研究者が集つて來るものである。既に一定の體系が打ち建てられてゐるやうな完成せる科學に、一新生面を開くが如きは、大言壯語の中に口走ることが容易であつても、事實容易のことではない。そこで勞せずして功を成さうとする研究者は、とかく新興科學を目指して行く。經濟學史も經濟學中のかやうな領域であらう。經濟學史上の夫々の學者なり學說なりを取

扱つたものは、ドクトル論文の頃なテーマとなり得ると云ふ理由が手傳つて、廿世紀に入つて以來、文字通りに汗牛充棟の盛觀を呈した。今まで人々がなした見方と違つた見方を以てするに非れば、學史上の一々の人物なり學說なりの取扱ふべきものが、もはや残されるまいと云へるほど、經濟學說史上のモノグラフィは廣大な場面に亘つて存在しゐる。

同様のことは經濟學史を全面的に取扱つた著作についても云へる。西歐諸國を問題となさず、我國だけについて見ても、かやうな著作は少からざる數に上つてゐる。然しながら、「之等の數にも拘らず、すくなくとも一般經濟學史に關する限り、私をして率直に言はしむるならば、不幸にして我國には未だ一冊のスタンダード・ウオークもないと表明せざるを得ない。即ち高橋、小林、北澤教授等のものは、洵に立派なものはあるが、しかしその學問程度から云へば、自からその序文にも告白されてある如く、入門程度の教科書用のものであり、沖中、瀧本、市川氏らのものは一層其感を深くせしめられる。」と云ふて、勿論私はそれらには又それらとしての特殊の存在價值のあることを否定

するものではないが、しかし、いま少し突き進んだオリヂナルは公平な検討なり、批判なり、價值づけを求むる場合、我國に未ださうしたものがないことを頗る遺憾に思ふ。」(古屋教授譯書序文五頁)これは古屋教授の感想に止まらない。公刊されてゐる經濟學史の著作を、例へば大學々生の教科用又は參考用として採用しようとしても考へると、誰しもよつであらう感想であらう。古屋教授が云つてゐるやうに、さうした感想がまた西歐諸國の讀書人のそれでもある。例へば「フランスツ・オーペンハイマーはいふ、吾々ドイツにおいて有する經濟學說史は、既にあまりにも古くなつたものか、又は極めて概括的のものか、又は一方的に偏したもののか、若しくはそれらの混合物に過ぎないものである。そこで彼は古代及び中世紀についてはオンケンの『經濟學史』とゲオルグ・アドラーの『社會主義及び共產主義の歴史』とを薦め、而して經濟學史プロバ一の原野である十八世紀以後(重農主義派以後)のものとしては、何より本書を薦めてゐるのである。」(譯書序文五——六頁)

かやうな感想をもつ人々にとつて、ゲードとリスト

の共著 *Histoire des doctrines économiques depuis les physiocrates jusqu'à nos jours* は、最も大きな満足を與へ得べき書物であらう。さればこそ、一九〇九年第一版を出すや、それは直ちにロシア語に譯され（一九一〇年）、一九一三年にはドイツ譯を見、今日では既に十箇國語以上に譯されてゐるであらう。原本は可成りの細字で本文だけでも八百頁、各頁には極めて細字の註があり、其らの註は多くは本文の補説である。それ故に原本は先づ文字通り老大であるわけであるが、それが十箇國に譯された所を以てしても、此書物は大なる學問上の値を有することは、云ふ必要もない。

今我國人は古屋教授の努力によつて、日本文により此書物の半分を味讀し得るやうになつた。勿論此書物の或部分は何らかの形式をとつて既に我々の知識となつてゐる。英譯を通じてばかりではない、第五編以下は既に十數年前に邦譯せられてゐるし、重農學派の部分は或雜誌（今それを思ひ出せない）に邦譯せられてゐるし、斷つてあつたかどうかは知らないが、大西猪之介教授の全集中の商業政策中でフリードリツヒ・リストの保護貿易思想を論じた所は殆んど全くデードとり

ストの第二編第四章が種になつてゐるし、徳増榮太郎教授がずつと以前にルイ・ブランと國民工場（企業と社會と題した雜誌中に）と題して書いたものも右の原本の第二編第三章によつたものゝやうな記憶が私に残つてゐる。且つ一二の知人がデードとリストの邦譯に着手したと云ふやうなことも聞えたこともある。然し並大抵の努力で邦譯が完成し得られるものではない。今眼前に古屋教授の譯書の上巻を置いて、教授の努力に敬服する。

衆知の如く、原著の文章は實に明文である。そして原著の各部分は分擔して書かれたものであるが、文體には目につくほどの不一致はない。然し學術書であつて見れば、二人の著者は夫々擔當した部分について責任を負はねばならぬ。従つて原著には、各部分の擔當者が明記してある。邦譯では此らの記載を全然省いて仕舞つたやうであるが、如何なる理由に出てるのであらう。（但し原著の或版では此らの記載がないが、譯者の譯出した第五版は Pp. XV—XVI で此らを明記してゐる。）第一編では、第一章 *Les Physiocrates* と第三章 *Les Pessimistes* とがデードの筆に成り、第二編

では第三章 *Les socialistes associationnistes* 中の Owen et Fourier がチードの筆に成り、他はリストの筆に成つてゐる。(譯本は第二編まで終つてゐる。) 著者の何れが筆をとつた部分も深さと要領を得てゐることゝに於て優劣はないが、我國の讀者にはリストが取扱つた部分の方が興味があるかも知れない。何となれば、英、獨の思想をも毫も輕視してゐるわけではないが、原著はもとゞフランスのドクター・コースの學生の參考書として書かれたものであるから、フランスの思想に詳しいのであるが、我々には餘り知られてゐないフランスの思想を取扱つた部分が興味多いのであるが、此らの部分が概ねリスト教授の擔當した部分であるからである。

譯文は流暢、平明、先づ申し分ないと云つてよいと思ふ。譯文が正確であるかどうか、一々原文と邦譯との比較對照する時間のなかつたことを、紹介者は甚だ不本意としてゐる。たゞ譯書を見て残念に思ふのは、人の名や佛語の發音が稀にはあるが、不正確でないかと疑はるゝものゝあることである。一つ二つ目についたものだけをあげると、Bousquet をブーザンケーと

云つたり、Denis を或所ではドニスと或所ではドニと云つてゐたり、Espinass をエビナスと云つたり Souchon をスユコンと云つたり、Product net をプロヂユイ・ネと云つたり……してゐるのは、紹介者の佛語の素養の乏しいためか、敬服し兼ねる氣がする。

紹介者は譯書それ自體については、多く云ふべきものをもたない。云ふべきことは寧ろ原著そのものについてである。今其らの一二をあげて見よう。

先づ、譯書になつた部分は勿論、残りの部分をも一貫してチードとリストの思想史の特色とする所は、學說が環境から全く抽象されてゐることである。私は、經濟思想が夫々の思想家の作品であり、またそれが思想的連續性をもつてゐることを否定しない。けれども重農學派の發生も、古典派の發生も、特に此派の自由貿易主義學說も、其らの學說を生んだ經濟的環境を考ふることなしに、説明の下され得べきものではなからう。また十九世紀初頭からの諸々の社會主義的システムの出現にせよ、十八世紀末からの産業革命の事實を無視して説明出来ないのは解り切つたことである。然し此解り切つたことが、チードとリストの思想史に於

ては顧みられてゐない。譯本が収めてゐる部分について見ると、一八四八年前後の經濟事情が社會思想に及ぼした影響を述べてゐるとき、フリードリツヒ・リストの保護貿易思想がそれに先立つドイツの經濟事情の影響を受けてゐることだけが目につく。それ以外には二人の擔當せる何れの部分に於ても、云はば思想の經濟的背景が明らかにせられてゐない。

第二に、右と同様の感じであるが、夫々の思想家の生涯が二三の場合を除けば述べられてゐない。思想史に傳記の概略を織り込むことは、其著作を稍ダラケさせることは事實であり、如何にも深味ない著作らしく見せしむる憂はある。然し思想史が思想を一つのヨビとして説明せねばならぬ任務をもつてゐるものとすれば、これもやむを得ないではなからうか。

此ら二點の缺點は、實はフランス經濟學史の特質でもあつた。これは佛蘭西の諸大學のドクター・コースが講座の一として *Histoire des doctrines économiques* をもつてゐたからである。然し此特質も次第に失はれんとしつつある。けだし、一昨年、フランス諸大學のドクター・コースは *Histoire des doctrines et faits*

économiques と變化せられたからである。

第三に、共著者は其著作を明快ならしむるために、複雑なる思想を可成り一方的に解釋してしまつたと云ふ缺點を藏してゐる。このことは譯本の後の方に異彩を放つてゐる所のリストが記述してゐるブルードンの思想に最もよく現はれてゐる。リストはブルードンを労働者から出て労働者の側にあつたやうに説明してゐる。所が事實ブルードンには百姓の一面があつたのであり——此面こそ彼の全面であつたかも知れぬ——、これを考へなければ、ブルードンの思想は全然理解出來ない。例へばリストはブルードンのうちに重要な思想の變化を指摘してゐる。最初の所有權の痛烈な批判から即ち平等の強調思想から、平等と自由との綜合即ち無料信用思想へ移つてゐる事實。所が事實に於てブルードンに含まれてゐた百姓的素質は、ブルードンをして再び思想を變化せしめた。一八五五年に書かれた *Projet de l'exposition perpetuelle* を大體エボツクとして、ブルードンは所有權の擁護論者となつて行つた。此ことを忘れたればこそ、ブルードンの主著作から *Principe fédératif et Théorie de la propriété* を考

ミットしたと云ふ結果も出て來てゐるのである。

(寶文館發行、オクタヅオ五七五頁、定價三・八〇)